

第二期 第四十二号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020.01.20 定有堂書店 発行

本屋と「読む会」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

本屋と「読む会」

倉吉センチメンタルジャーニー

千代に八千代に

坪井日記 ②④

このへんの本屋さん

ひとは何のために記録するの？

再び幻の映画を尋ねて (後)

令和元年の人

鳥取あれこれ その四十一

ダーチャと初戀

幻の歌人杉原一司のことを調べながら

元高級官僚による暴力癖のある引きこもり…

クリムトと旅の醍醐味

マンチャリ

…… 編集後記

奈良 敏行

萩原 俊郎

ワクサカソウヘイ

齊藤 仁昭

鳥居 貴彦

芝野 浩貴

ムラカミヒロシ

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

安藤 隆一

古賀 啓三

あきの素生

ドフラメリア



先日知らない人からメールがあつて、読書会をやりたいけど、なにか指針を教えて欲しいとのことだった。県外の方だが、ときおり立ち寄る機会があり、定有堂の「読む会」を知ったらしい。

定有堂教室「読む会」は一九八八年三月にはじまり三十年ほどつづいている。きつとなにか秘訣があると思われたのだろう。自分でもよくわからない。でもきつと何かあるのだろう。

問いかけてきた人はすでに準備に入っていて、『学校をつくり変える』という本を読もうとしている、と具体的にいった。でもそれは勉強会であつて、読書会とは少々異なるのでは、とわたしには思えた。微妙な違いだがこのあわいに「読む会」は位置している。

「読む会」は「学び系」だが「結論をつくらない」。勉強会は結論を見出しているとする。結論が共有できるのは同質な人たちが参加しているからだ。「読む会」は異種で多様の「集い」なので共通理解を求めている。

わたしは三十年変わらず片隅で、無言で耳を傾けているだけなので、そんな風に見える、というだけの話だ。テキストも売るだけできちんと読まないし、発言もしないし耳学問を積み重ねるだけだ。むろん店頭には反映されていく。そこからがわたしの役割と分別している。

ながくつづく理由は「人」だと思う。そんな人が数人いる。どんなひとたちなのだろう。

そんなひとに交わってきて、こういうことかと気づくことがあった。いくつかの本にも、似たような風景がうかがえた。

そんな読書会論のような、二点の本を以前持っていた。

ある時期から、自分より所有するのにふさわしい人に、この会で出合おうとあげてしまうようになったので、いまは手元がない。ひとつは『共同研究転向』。熱心に会に参加していた共同通信の記者に、転勤移動の機会にゆずった。異種で多様の「集い」の中で考えを深めあった本だ。

「読む会」は勉強会ではないのだが多様性を大事にするという点で似通ったものがある。もうひとつは別の人にあげたのだが、めんどうみのいい方なので立ち位置がきつと共鳴するとひらめきがあった。それは『日常的思想の可能性』だった。この著者は『共同研究転向』にもかかわった人で、「日常」に形而上学を持ち込まないという深い反省のもとに、考えを深め合うことを主張したひと

だ。

「集い」といういつもこの本のエッセンスを思い起こす。手元がないので記憶は正しくないかもしれない。人の集いをサークルと呼んでいた時代がある。そんな頃のことだ。「サークル論」という一節があった。サークルは長く続いて欲しい。ながくつづく集いをみていると、気づくことがある。「主題」と「きっかけ」を大事にしていくということだ。集いにはテーマつまり「主題」がある。でも「集まる」ということ自体、本当は大事なことだ。誰々がいたのしいから参加する、というひとつもいていいはずだ。意見を交換するだけでもたのしいので、結論をつくる必要もない。なまじ結論が明確になると、なにかしなければならなくなって、会が立ち消えになる。たのしいから長続きするという説だが、しかしもうひとつ大切なことがあるという。例をあげて、焚火に似ているではないかという。往来にあなたかそんな焚火がみえる。ちよつと寄っていつて暖まろうと人が集まる。あたたまったら去っていく。それで十分。焚火はそれだけのものだ。でも焚火を絶やさないといいことも大事だ。立ち寄り去っていくひとが、一本薪をおいていけば火は絶えない。むろん焚火守りも必要だ。

焚火守りについてはこんなことを言っている。焚火とはサークルのことだ。「主題」がなんであれ、とにかく

つづけたいからとりあえず参加する。こんな人が三人いれば長く続き、ながく続けるにはこんな人が不可欠なのだ。

「読む会」にはたしかにそんなひとたちがいる。異種で多様の「集い」をたのしんでいるので、無方法だ。テキストは毎月かわる。店頭でその月のテーマにひかれ飛び入りする人も多い。でも黙って見ていると、とくにその人を仲間にしよとうという動きをだれもしない。わたしは店を閉めて遅れて参加するので、今日来たひとの名前聞きました？と尋ねると案外誰も聞いていない。

この焚火守りのひとたちそれぞれの個性もおもしろいのだが、またそれは別の話だ。存在しないが存在する人もいる。むろん発言しないが、いつもそばで見守っている。「読む会」の焚火の火を最初に熾（おこ）し、九年守り、一足先に冥界に旅立った『伝えたいこと』の著者だ。思い出と共に、それからさらに二十四年、焚火は燃え続けている。定有堂の店内では『伝えたいこと』に、「定有堂で一番読んで欲しい本」とカードを添えている。それだけで以心伝心買ってくれるひとが多い。

お教えする指針はないけど、「読む会」はこんな「集い」のようにわたしには見えています。

思想の科学研究会編『共同研究転向』平凡社 上 1959 中 1960 下 1962

鶴見俊輔『日常的思想の可能性』筑摩書房 1967

浜崎洋三『伝えたいこと』定有堂書店 1997

（参考）定有堂教室「読む会」について、「選書係」の岩田直樹さんが、定有堂のホームページにたくわしくお書きになっています。

「今月読んだ本」第204回「NO BOOK, NO LIFE？」
12／29 掲載。

倉吉センチメンタル・ジャーニー

萩原 俊郎（倉吉市在住者）

空が広く感じる。そして夜が暗い。

これは、これまで都会から倉吉に来た人にさんざん聞かされた言葉なので、ああ、僕もいつの間にか「都会目線」になつていたのか、と気づく。

東京から、ホームグラウンドの倉吉に帰ってきた。勤務地としては5年半ぶり。その間（とくに東京勤務の2年半近くは）会議で毎月帰つても一、二泊程度だったので、ほとんど街を歩いていない。とくに私が好きな旧市街地の界限は。

今の仕事はそんなに忙しくない。冬の山陰には珍しい、抜けするような青空が見える昼下がり。白壁土蔵群から西へ足を運んだ。

◇ ◇ ◇

まずは、東京にも話が伝わってきた、今年夏にオープンしたという中部地震の「福高記念」（「復興」のもじりなんだろうが、ちよつとセンスが倉吉らしくない）の複合施設「打吹回廊」へ。

平日の午後だからだろうか、小ぎれいなレストランも土産店も閑散としていた。わずかに近所の子供たちが、レストランと展望台（なぜか早くも修理中）をつなぐ二階の渡り廊下（それで回廊なのか）をぐるぐる走り回って、鬼（ご）をしてる。

赤瓦の白壁土蔵風だが、あまりに「そのまんま」なので感動がない。市内には同じく白壁土蔵風の市営住宅や交番がある。

打吹公園内にある倉吉博物館もそうだが、大きな片流れの屋根は和のテイストにどこかスペイン風の味付けも感じさせるモダンな名建築で、1975年に建築業協会賞を受賞している。

渡り廊下の裏の板や鉄骨は早くも傷みやサビが散見されて、一抹の不安を感じた。

◇ ◇ ◇

老朽化したアーケードが取り払われ、冬の日差しが入るようになった打吹商店街を、西。

その昔、この商店街で評判の美少女がアイドルを夢見て上京、ようやくTVドラマでチョイ役を得たものの、プロデューサーから熱烈求婚されて芸能界を引退。しばらく若き日のミスチルも通ったカフェをやっていたが（本人に聞いたから本当だろう）、夫に先立たれて帰郷し、ここで喫茶店を開いた。すると、かつての「追っかけ少年たち」、今は初老の男たちが詰めかけて、たちまち人気店に。ところがある朝、店内で倒れている彼女が発見された…。

その店、今は「夜長茶廊」というちよつとおしゃれなカフェになっていた。インドカレーとこだわりのコーヒー。若い夫婦が経営しているという。バス通りにある、同じく夫婦でやっている昭

和こだわりのカフェ「モダン」も一度行つてみたい店だ。

この旧市街地にわざわざ出店する若者たち。でも、そのセンスに共感を覚える。あの「打吹回廊」とはどこか「ベクトル」が違ふ気がする。

◇ ◇ ◇

銭湯の「大社湯」は健在だったが、人の好いM牧師夫妻がいた倉吉復活キリスト教会は、さら地になっていた。地震に耐えられなかったらしい。倉吉での布教の歴史を記した石碑がポツンと立っていた。豪商の淀屋があった旧牧田家住宅は、昭和の改築部分が昔の姿に復元されていた。

その斜め向かいに「倉吉ブックセンター」という名前に似つかわしくない、町屋をそのまま使った本屋さんを見つけた。

ガラガラと引き戸を開けると、奥に長い店内には新刊にまじつてジャズやインテリア、サブカルチャー関係の雑誌や本、背表紙がいささか茶色くなった文庫本や世界文学全集なども並んでいる。どこか「定有堂っぽい匂い」がする。

「ジャズは親父の趣味なんです……。レジにいた若い男性と名刺を交換すると、店主と思いきや「ディレクター」とあり「本の装丁、デザイン」と書いてある。やがて店主の「親父」が帰ってきた。

どこか見覚えがある。そうだ、昔、職場のそばにあったショッピングモール（パープルタウン）の本屋の親父だ。すっかり白髪になつていたが、面影はある。「ここは車のナビも迷うほど入り組

んだ通りなんです……。息子は照れ笑いを浮かべた。

このような場所で本屋が成り立つのか、お節介ながら心配になつた。でも、何か理由があるんだろう。誰かに貸したまま行方不明になつていた谷口ジローの『遙かな街へ』を買つて店を出た。

それにしても、この若者、田谷禪（えんや・ゆずる）さん自身にどこことなく人間的魅力を感じる。あのカフェに通じる匂いがある。

◇ ◇ ◇

まだイオン（ジャスコ）もなかった昭和の時代、倉吉は地元業者らが時代に先駆けて自ら都市型ショッピングモールを立ち上げ、市内のダイエー系列の大型店としてのぎを削つた。その頃が「全盛期」だったかも知れない。当時は鳥取や米子からも客がやつて来た。

ところが平成に入り、人口減と産業の衰退、さらに東西部にできたイオンが追い打ちをかけ、街はさびれる一方となつた。

さて、このまま「安楽死」を迎えるのだろうか。いや、まだ分からない。ほんの小さな動きだが、冬の日の午後歩いただけで、何かを感じた。それは、行政の補助金や大型施設の建設といった「夢よ、もう一度」的な動きではない、新しい何かだ。

さて十数年ぶりですが、「定有堂倉吉支店」また店開きます。

千代に八千代に

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

さて、二〇二〇年である。

ともかくにも、いよいよ東京オリンピックが近づいてきた。私はスポーツというものに一切興味が持てない人間で、なおかつ大きなお祭りが纏う「全員参加しましようね」的な空気が生理的に苦手なので、オリンピックについてはできるかぎり見て見ぬふりを決め込みそのままスルーしたいと思っているのだが、なんせ相手は世界で一番壮大なスケールを誇る祭典だ。その影は年始から早くも個人的暮らしの中に差し込み始めている。

こないだ、六本木へ仕事に赴いた際の昼時、「寿司でも食べるか」ということになり、ヒルズの地下へと足を向けた。そこには六本木とは思えぬ低価格で客を招く、昔から馴染みの回転寿司屋があるのである。

しかし、暖簾をくぐって驚いた。回転レーンが取り外

されている、そして檜造りの「カウンター」の寿司屋へと変貌している。なんだ、どういうことだ。大将にわけを尋ねると、「オリンピックのせいだ、ヒルズで回転寿司をやっちゃダメだってお達しが来てさ……」との返答。なんでも回転寿司は「海外からのお客さんから見たら不衛生」という謎の烙印を押され、経営方針を変えるようお上から指示が来たのだという。低価格であったはずのその店は、もはや「六本木料金」としか言いようのない、面白みのない店へと着地していた。

また、オリンピックの影は私の仕事にも影響をゆるやかに与えている。

私は文筆業と並行してライブ制作業も営んでいる。このライブ制作業において特に要となる業務はなにかというと「小屋押さえ」だ。それぞれの興行内容に応じて、ライブハウスや劇場の空いている日程を前もって押さえるのである。

ところが、2020年の夏に行おうとしている興業のために色んな小屋を当たってみたところ、不思議なくらいにどこも空いていない。真夏というのは意外と興業の閑散期で、例年だったら簡単に「小屋押さえ」をすることができるのに、これは一体どういうわけだろうか。もしかして、オリンピック特需を見込んで、様々なエンターテインメント団体が先回りで押さえているのか？

しかし、真実はもう少し違う角度に存在していた。それぞれの小屋主さんに話を聞くと、なんと都内のライブハウスや劇場はオリンピック期間に「体育倉庫」、すなわち用具置きやボランティアスタッフの待機場所として使われるのだという。ああ、なんてバカバカしいんだ。「スポーツと平和の祭典」が行われるその間、文化は一時通行止めをくらうのである。

東京オリンピックの迫りくる影を、そんな感じで苦々しく思っていたところ、思わぬオフアアが舞い込んだ。

東京オリンピックの裏では、様々な関連イベントが実施される。その中のひとつ、芸術の祭典『東京ビエンナーレ』の、ステージエンターテイメント部門のキュレーターをやってくれないか、というオフアアである。

思えば、中学生の時も高校生の時も、運動会は苦手だった。でも実行委員や応援団には参加して、そこで「茶番」が披露できる間を探った。エール交換の儀式や閉幕式、そこにナンセンスなコントを差し込むことだけが、自分にできる精一杯のレジスタンスだった。

どうにも閉塞感のはびこる世界となってきた。不真面目を許さず、不寛容に満ち満ちたこの現代は、端的に歪んでいると言わざるを得ない。小学校や中学校では、いまだに式典のたび、国旗を掲げて、国歌を全員参加で歌っているという。政治とか思想とか、そういうのは抜きに

しても、明らかに不健康な状態だ。

二〇二〇年は、「茶番」の年にしないと、と思っている。意味ばかりを世界が求めるのなら、そこに究極的な無意味を放り込む。「全員参加」のムードが溢れる厳粛な式典が開催されるのならば、そこに大いなる「茶番」を投入する。それが私にできる、ささやかなレジスタンスだと思っている。キュレーターのオフアア、大いに結構。どうせ巻き込まれるのなら、千代に八千代に何も残さない、圧倒的に無意味なものをそこに出現させてやろう。私の今年のキーワードは「フルメタル茶番」である。もちろんこの茶番は、参加も不参加も自由です。

齊藤仁昭

(長崎書店)

12月某日

子どもの保育園での発表会に出席する。ステージのある板張りの広めな教室で他の保護者の皆さんと開演を待つ。緞帳が開いてさあ出番となったが、息子はステージ上に座ったままで、なぜが手にした絵本をぼんやり眺めていた。うわああいつ絵本読んでるよすげえ、と興奮して妻に話した。妻も笑っていた。

名前を呼ばれてお返事をしたり、最近できるといになったことを先生が代わりに話してくれた後に実行したりするはずだったが、どちらもあまり聞いていなかったように、できなかった。ステージで堂々としていたからまあいいかと思う。成長ぶりに感動して泣いちゃうかもしれない、という前日までの思いは杞憂だった。しかし息子も同級生もみなかわいらしかった。上の学年の子どもたちの歌や踊りもたいそう素敵だった。

元気に育ってくれるだけでいい、という親心の定説み

たいなものに今までは不信感があったのだけれど、不信心者だったのは私であって、ひねくれたまま大人になつてしまつて本当にどうしようもないやつだと反省した。素直に生きていきたいです神様。

12月某日

東京でケバブジョンソンの練習および録音作業を行う。京都に住む知人が自身の営むレーベルからFinchレコードを出さないかと提案してくれており、その作業。A面は次回のアルバムに収録する予定の「揚子江」という曲で、B面は1stアルバムに入っている「my sunday girl」(デューク・エリントンのカバー)という曲をリアルレンジしたもの。

演奏は先月までにだいたい録れていたので今回は主にコーラスの録音だった。コーラスは全員がせねばならず、歌が苦手な私はとても緊張していた。が、日々車での移動の際に常にコーラスの練習を大声で行った成果が出たのか結構スムーズにOKが出た。うれしい。40歳になつても少しずつでも歌が上手くなれるのね。継続は力なり。ただの下手の横好きですが。

失敗するかもというネガティブなメンタルで録音に臨むと、録れた音も弱気になる。メンタルの貧弱な自分は今までのアルバムにそのような部分があることを少し悔やんでいる。今回からのレコーディングではメンタル

面を特に重視してみたい。

肝心のアルバムは2016年を最後に出せていないが曲は溜まってきて10曲ほどある。これも録音を始めるとして、マイペースな我々はいつ完成させられるだろうか。二〇二一年くらいかなあ……。次は5枚目のアルバムだけれど、二〇二一年になってもまだアルバムという概念は残っているのか。そもそもCDに需要はあるのか。データでのリリースも考えないといかんですね。いやそもそも音楽を聴くような余裕が社会にあるのだろうか。

ところで、5thアルバムがカッコいいバンドってどれでしょうね。だいたい4枚目とか5枚目とかになるとつまらなくなってくるバンドの方が多いように思う。ちよつと調べてみようと思います。でも失敗作を作るのもいいかもな。

12月某日

ブルータスの「1・15合併号（特集・危険な読書）」に「熊本の文芸を辿る。」という記事が掲載されています。坂口恭平さんと渡辺京二さんによる対談や、坂口さんの散歩コースが紹介されており、長崎書店の支店である長崎次郎書店（私の主な勤務先）もチラッと乗せていただいております。本屋でお見かけの際は是非手にとって見てくださいます。

きき

アラビアの風がやがて空を出る

バラ色の風がやがて空を出る

さつきまで待ってたの

さつきまで待ってたの

まじないをかけて幻を見せて

でたらめな街へもう一度連れ出して

さつきまで待ってたの

さつきまで待ってたの

鳥になるまで 外に出ないで

一緒に踊りだすのさ

はじまりを見せておしまいを消して

溢れ出す風に音楽をつけて

さつきまで待ってたの

さつきまで待ってたの

鳥になるまで 外に出ないで

一緒に踊りだすのさ

（ケバブジョンソン「アラビア」 作詞：杉浦真寛）

J Rの本屋さん

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

「このへん本屋さん減ったよねえ、昔はそこのかどもあつたんやけど」と、昔話をはじめのおばあちゃん。「本屋さんもへったわねえ」ってほんただろうか。結構ある気がするんやけど。

自転車ですくくらの堀川商店街にはHorikawa AC Labがある。印刷所と本屋さんがかつたびかびかの実験室みたいな本屋さん。ガラス張りの外見と真っ白い内装は一見本屋さんには見えないかもしれない。でも並んでる本は文庫があつて新書があつて、家事の実用書とかパズルの雑誌とか。普通の本屋さん。デザイン書と洋書の京都ガイドがちよつとおおいかな。

西へ徒歩15分くらい、千本丸太町の角に萬年堂がある。

バス停までいく途中にちよいちよいのぞく。雑誌とコミックが並ぶ本棚と、年季の入った配達用のカブ。前を通るたびに安心する。いつまでもあつてほしい。祈るような気持ちでたまに雑誌を買ったりする。

子どもの保育園に行く途中、千本通を15分くらい自転車で走るとあと2軒、おなじような規模の本屋さんがある。大宮通を北に上がっていくともう1軒。どこも雑誌のスタンドがおもてに出ていて、コミックがずらりと並んでいる。

ちよつと足をのばしてJR二条駅までいけば大垣書店がある。100坪ちよつとかな。広い。Mさんがいうには「あのなんでもなさはすばらしい。映画見に行ったらぜつたいよる。安心感ある」とのこと。

古本屋さんで一番近いのはあつぷる書店かな。くたびれた新書とか古い辞書とかがずらりとある。安かつたり安くなかったりする。よく行つてたのは古本市場の西陣店。絵本が80円とかで買えるんですよ。でも移転するとかでいまは閉まつてる。移転後のオープンは春だそうですね。80円均一コーナーはなくなるんやろうか。

実家が近いのはクライモブックス。お店は自転車ですくくくらい。実家には歩いて3分。おかあさんが犬の散歩したはる。奥田さんとみつちんにはコロッケ屋さんでた

まに会う。カライモブックスから1分くらいで町家古本はんのき。どちらも大先輩。いろいろ教えてもらっている。近所でよかった。ほんとうによかった。

さらに二条の駅前にはマチマチ書店が引っ越してきた。美術書とか多い古本屋さん。そしてわすれてはいけないのが狂言屋。

狂言屋は斉藤さん家。古本イエーの場所。古本イエーとはもともと古本屋がよつてたかって一般人の民家を一日だけ古本屋にしようという少々狂った遊びだった。それがいまでは2ヶ月に1回定期開催されるようになり、いつのまにか「狂言屋」という看板もできていてもうだれにも全容が把握できなくなっている。本屋にカウントしていいのか迷う。でも本が買える場所ではあるし本屋なのだろう。行くと「ちよつと飲んで行くかー」とビールをすすめられるし、高い確率でカレーを食べさせられる。うまい。こないだは集まった人たちが線香花火をやっていた。なんだろうあそこは。

歩いて1分のマガザンキョウトにも本のコーナーがある。「泊まれる雑誌」と看板にはある通り、ゲストハウス兼ギャラリー兼編集室兼雑貨屋兼本屋みたいなところ。なんて説明したらいいのかいつまでたってもわからない。聞かれたら「あそこにおもしろい場所ありますよ」という。

そんなこんなで自転車で20分以内の範囲に新刊書店が6軒。スーパリーの雑誌売り場とかもいれたらもつとある。そこに古本屋さんをよくわからない家あわせたら13軒。多いと感じるのか少ないと感じるのか。ぼくはめっちゃくちゃ多いとおもうんですけど。

「減ったねえ」というおぼあちゃんが間違っているとは思わない。減ったんだろう確かに。もつとたくさんあった時代。もつと本が売れていた時代。それが普通だった時代。でも僕は本が売っていたという時代を知らない。大学4回生のとき海の方こうでリーマンショックがおこった。それがどれくらいのものなのかわからない。社会に出た時から景気が悪かった。悪いと言われ続けた。ジャンプなんかみてるうちになくなっていくたんやで、とかいわれてもしらん。

今日も顔の見えるお客さんと親切なたくさんの本屋さんで本を売っている。

ついに何のために記録するの？

— シュメール人は素因数分解を知っていた？

芝野 浩貴

(地球探検家)

軍の撮影した沖縄戦での首里城への無数の砲撃跡の空撮写真が展示してあり、その密度の濃さに改めて驚愕したのだが、首里城には再度復活してもらいたい。焚書坑儒ならずとも、本の出版サイクルはどんどん速くなり、半年で本は消えるようになった。ますます古書店や蒐集家の存在意義は増す。

首里城が焼けた。最後に観たのは一昨年(2019年)の11月だった。その時は沖縄の先生方に沖縄の蕪算の話をしていただいた。島津藩は文字の使用を平民には禁止していたから、明治になるまで蕪での伝達は行われていた。住民台帳や年貢の記載帳として為政者に使われることもあっただろうが、取引の場所告知など各村内の暗号的な会話としても機能していただろう。(もちろん男女の恋文も中国から伝わったとあるが位取り記数法までは確立されていない。1〜4までは線状で5になると輪っかになる。6・7・8・9と数が増える記し方はエジプトというよりマヤ的に近く、情報の記憶や記録の手段が目的だった。同じ結繩のインカ帝国でのキープは、鉱物・穀物・家畜の種類と数量、人口、武器の数などの記録、裁判の判例など幅広く保存し、ひもの方向や色まで情報源として使い、数学的思考へ繋げるものとなっていた。沖縄の公文書館では、米

蕪やキープが記録保存の素材として使用されたのは、その土地の気候にもよる。両河の土地の間を意味するチグリス・ユーフラテス川の流れるメソポタミア地方ではシュメール人が都市文明を作り、世界最古の文字も粘土板に記録されている。肥沃な土地で泥に恵まれ粘土が大量に生産できることで、葦で作ったペンで粘土板に文字を刻み文書を残した。内容は交渉事がメインだった。無文字口承共存社会から贈与・負債の世界を超えて豊富な穀物と近隣の鉱物を交換するための貨幣への芽生えか？ エジプト文明ではヒエログリフがヒエラティック、そしてデモティックと変遷したように、メソポタミア文明では絵文字から楔文字へと変遷した。楔文字は約6000ある。2016年にドイツ人のオッセンドライバーが「バビロニア人が木星の動きを捉えていた」ことを発見してニュースになった。

古代人の思考を解明するには、数学が手段として使え

る時は、言語だけより高い確実性を持つて結論を得ることができることの一つの例だが、数学を利用して従来のシュメール・バビロニア観を修正したのが日本人であることを皆さんはご存知だろうか。バビロニア時代は角度の概念はないと言われていたが、紀元前2300年アッカド王朝時代に角度の概念、円周率、台形の二等分線など使われていたことを室井和男は指摘していた。星の動きは台形公式で説明はついていた。アッカド語とシュメール語を勉強して楔文字を解読した室井氏は1990年代にはそのことは気がついていた。(詳細は「バビロニアの数学」参照)室井氏によると、初期シュメール語の絵文字が左九十度回転して、三角と棒の楔となった。性器が長さ、頭が幅、目が逆数、足は掛ける。多音多義語。(世界初のシュメール語演劇をロンドンで行った古文字研究家でもある能楽師安田登は、イナンナの冥界下りを演じるにあたり、「あゝ、かゝ、さゝ」の音が多くてやりやすかったと述べている。)計算の間には「君は見る」という意味を表す言葉を挟みアクセントをいれている。60進法の発見もシュメール人であることを看破し、円周率は $3\frac{1}{8}$ を使っていたことを示した。古代ギリシャ数学が古代オリエント文明を礎にしていた事が明らかになったのである。

SVOの英語圏では 3×2 は2 (multiplicand)を3

(multiplier)倍するとするが、SOVのシュメール語は日本語同様、3を2倍すると読む。これを手掛かりに人文系学者間で未解決であった数字の部分の解読してエンメテナの碑文を訳した。エンメテナの碑文とは、ラガシュ王エンメテナが隣接の都市ウンマとの長年の戦いを記録したものだ。ウンマに大量の大麦を貸したが、幾らで返すべきかの裁定に複利計算が用いられている。(+)のX乗が7になる年数は7であったが、実際7年後に来たのは返済でなく攻撃であった。33X770より更に1年後の貸し始めから8年後に返済した。シュメール人は王の命令に従って正確に計算を実行した。世界で初めて複利計算をしたのである。

室井氏は数学の分野だけでなく他の文書も読み込み、「隣の牛はよく見える」などの生活語の本も書いている。「永久に生きるとは」参照)同じ算家として、今を誤魔化すのでなく、永久に恥じない生き方をしたい。

(追悼)水のないアフガニスタンはラピスラズリでメソポタミアと交易していまに至る。自分のためだけでなく、大義のために命を亡くされた中村哲氏に心からご冥福をお祈りいたします。

再び幻の映画を尋ねて (後)

ムラカミヒロシ

(フライング・ブックマン)

ン

(承前)

遂に、地割れが一続きになり（地球を一周したのである）、その瞬間、地球内部から巨大な光球が飛び出し、宇宙空間に遊泳する。

第二の月が誕生し、地球の崩壊は収束する。

という物語で、これでいいのか、と思わず突っ込みを入れたくなるトンデモさ加減である。

活字での確認は、ここまでと諦め、ユーチューブに頼る。幾つかのトレーラー映像がアップされているが、問題のシーンは見つからない。

結局、映像ソフトを入手するしかなく、アメリカ版を注文。待つこと三週間、彼の地から届いたソフトを再生。

物語は前述のとおりだが、詳述すれば、クライマックスで、アフリカの地下にある博士の研究所が放棄されることになり、所員は退避するが、博士は自責の念（不治の病に侵されてもいる）から一人残る。

これを連れ出そうと、博士の妻と若い学者（実は愛し合っている）が戻ってくるが、果たせず、二人だけで脱出を図るも、施設が崩壊しエレベーターに閉じ込められてしまう。

ここからが問題の場面で、二人は、天井の割れ目から外に出、エレベーター構内の骨組みを這い上がり、漸く地上に逃れ出るが、そこは炎熱の巷であった。

と言う訳で、筆者の記憶していた脱出場面はわずか二分ほどであったが、確かにあった。エレベーターの大きさなど、細部の食い違いはあったが、大筋で記憶どおりであった。めでたし、めでたし。

国内封切は六五年四月。鳥取での公開は夏休み頃が妥当な線かと思うのだが、そうなると少々具合の悪いことがある。同じ年の春休みに東映動画の「ガリバーの宇宙旅行」が公開されており、これは間違いないで見ているのである。このままでは、そちらが最初の映画になってしまっているのではないか。ここまで来たら、はっきり白黒つけな

ければ気持ちが悪い。仕方がない、新聞を調べよう。

現在の紙面を御覧になれば分かるとおり、ローカル紙には、毎週末、県内映画館の上映プログラムが掲載される。五十年前もそうであろう、というより、映画が娯楽の中心だった時代であるから、載っていない筈はない。

果たして「ガリバーの宇宙旅行」は、一九六五年五月上旬。ゴールデンウィーク番組であった。これは上手くないですよ。然るに、「地球は壊滅する」は、夏休みにも、シルバーウィークにも、十二月まで調べても出てこない。まさか、見たつもりの本当の「幻の」映画だったのでは：と不安になり、念の為、もう一年分調べてみると、あった、あった、ありました。六六年一月末から二月初めという中途半端な時期に、「首のない馬」「わんわん物語」との三本立てで、栄楽館に掛かっている。当然、デイズニーの方がお目当てだった筈である。そういうえば、いじわるシャム猫が尻尾を立てて気取って歩くシーンを覚えていいるなあ。

「首のない馬」の方は全く覚えていない。観ずに帰ったのかもしれない。(洋画の三本立てというのは、一本がアニメとはいえ、子どもには辛い。トータル四時間半

だもの)

調べてみると、フランスの児童文学作家ポール・ベルナの原作で翻訳も出ている。パリの下町の子どもたちが、強盗事件で行方不明になっていた札束の袋を見つけるお話である。

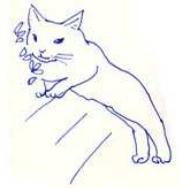
念の為、こちらも、DVDを取り寄せてみた。原作を手際よく、コミカルにまとめた面白い作品だったが、思い当たる場面はひとつもなかった。矢張り、観なかったようだ。

想像するに、プログラムが「地球」↓「わんわん」↓「馬」の順番で、入館した時点でやっていた「地球」は仕方なく付き合ひ、本命の「わんわん」を観たら、もういいや、帰ろう帰ろう、となったのではなかるうか。当時の映画の鑑賞方法は、そういったものであった。

という訳で、生まれて初めて見た映画は「ガリバーの宇宙旅行」ということに落ち着いた。

いや実は、今回の調査で、新たな不安の種を見つけてしまったのだが、長くなるので、これはまた後日の話としよう。

令和元年の人



山本 千津子

(KOHKA コシカ)

二〇一九年は新しい元号になり、天皇陛下即位の祝賀とラグビーワールドカップ日本代表の活躍で国内は盛り上がった。政治や経済、社会問題には目を向けたくない。個人的には、十二月に「ペシヤワール会」現地代表の中村哲医師がアフガニスタンで銃弾によってその命が絶たれたこと、十月に緒方貞子元国連難民高等弁務官がこの世を去られたことが、今後とも忘れられないと思う。

このお二人の名前と顔と業績はマスコミを通じて知っているくらいだが、名前を聞いて思い出すことがある。かつて私はロシアのウラジオストクで日ロ文化交流の仕事をしていたことがある。日本の国や地方自治体が行うものは予算もあり、担当者がきちんと話を詰めて問題な

く、表面上は成功に終わる。事業としての継続性はあっても、出会った両国の人間同士のつながりを継続するのは、なかなか難しい。民間交流で縁があつてロシアの人たちと知り合い、仲良くしたいと強い気持ちのある日本人は、お互いに望むこと、できることとできないこと、意思疎通をはつきりさせていた。時には妥協もし、納得した形で一緒に何かをする。音楽やバレエ、絵画展示等を共同で行う。

ウラジオストクに桜を植える会の活動もそうだ。桜の公園を作り、日ロ交流の場にしようと二十年前に大人達だけで始めたものが、ライラックも植えることになり、今では中学生のお孫さんたちの世代に引き継がれて双方の交流が続いている。自分たちでアイデアを出しながら、できる範囲でメールのやり取りや訪問を続けられている。戦争によつて犠牲になった人々の無念な思いを語り継ぎ、平和への願いが心のうちにある。その活動の中心になっている方から中村哲氏について知った。私には信じがたいほど相手のことを思う気持ちで交流されている姿、その誠実さは訃報後の中村医師に関する報道から納得がいった。ロシアとの交流の陰にも中村医師がいらしたのだ。

ロシアから帰国して三年ほど、国際協力機構（JICA）が受け入れる研修生に同行する仕事をしたことがある。ソ連崩壊後に独立した中央アジア・コーカサスの国々、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、グルジア（ジョージア）、アルメニア、アゼルバイジャンから行政や各分野の専門家たちが、防災や減災の取り組み、緊急医療活動を学びに研修に来ていた。

私の住む兵庫県は、阪神・淡路大震災の経験から特にこの分野の研修生を受け入れていた。これらの国々も自然災害に見舞われ被害が拡大するのをいかに防ぐかが課題だった。座学と現場視察で兵庫県の取り組みを紹介され、それを活かすのは彼らのだが、素晴らしい日本の科学技術、医療機器があつてこそできることで、極端な言い方をすれば、自分たちのような発展途上の国にとつては関係がない、という感じも受けた。実際に、日本政府からの援助による研修なので、本音は言えない。援助という名目であっても、国民の税金は日本国内で関係する組織や人に還元されるべきなのか、と私自身お給料をもらいながら、疑問に思っていた。援助であるからこそ、本当に現地の人が必要としていることに現地に関わって資金も使うことに重きを置いたほうがいいのにと、彼らとのちよつとした会話から思ったものだ。私が仕事を辞

めた後に、緒方貞子氏がJICAの理事長に就任されると聞いた。これで変わるかもしれないと喜んだ。

研修生の彼らからいただいたものが三つある。毎回メンバーは違つていても同じだ。家族や年長者をはじめ人を大切にして、自分たちの伝統文化を誇りに思い愛していること。東大寺を案内しながら、いかにイスラム教がすばらしい宗教であるか説得され、広島平和資料館では、日本は被爆国であることをもつと世界に発信するべきだと研修生から諭されたこと。アメリカなどの先進国にも研修に行ったが、日本女性のような気遣いや優しさは感じられなかったということ。私の周りの先輩は、皆女性で既婚者だった。語学ができる主婦という立場で、年間にいくつかの研修に同行されていた。まさに女性が活躍していた現場なのに二十年前は彼女たちの存在は認識されていなかっただろう。

このような経験ができたのも、いつか外国に行つてみたいなると漠然とした夢をどこかに持っていたからだろう。それは毎週見ていた「兼高かおる世界の旅」へのあこがれだったと思う。令和二年の一月で、はや一年か。

鳥取あれこれ その四十一

内田克彦

(地域研究家)

後、再び都電に乗り引き返して飛鳥山駅で降りる。再来年の大河ドラマが渋沢栄一を取り上げるので、「渋沢史料館」を訪れてみたのだが、リニューアル工事中で閉館していた。「紙の博物館」も同様であった。「北区飛鳥山博物館」のみ開いており、「秋期企画展 古写真はわたしたちに何を伝えるのか？」を見る。

再び都電に乗り込んで、大塚駅へ。駅前の定宿ホテルにチェックインした後、山手線で池袋駅へ。ジュンク堂書店に二一時過ぎまでいて、再び池袋駅から大塚駅まで戻って駅近くの飲食店で夕食をとり、ホテルへ。

一二月に東京で所用があり、東京のまちを一年半ぶりに歩いた。茗荷谷での用を昼前に終え、山手線大塚駅まで歩くことにし、途中の店で昼食をとった。都電荒川線に大塚駅前駅から乗り、外の景色を見ながら、荒川二丁目駅へ。少し歩くと、「吉村昭記念文学館」がある。企画展「海も暮れきる―俳人、尾崎放哉を見つめて」を開催中で、常設展示とあわせてじっくり見た。自筆の「取材ノート」に、南郷庵の前の住人は鳥取の人とあった。帰鳥してから『海も暮れきる』を見ると、次のように書かれていた。

それまで放哉と同じ鳥取県生れの男が庵を守っていたが、他の庵に移ることになったので、放哉の希望をかなえることができたのだという。

『常設展示図録』と『津村節子展 図録』を購入した

次の日朝、山手線で新宿駅に出て、京王線芦花公園駅へ。「世田谷文学館」で開催中の「小松左京」展は、月曜日休館。折角だからと、足を延ばして「蘆花記念館」に行く。徳富蘆花といえ、大河ドラマ『八重の桜』の山本覚馬の娘久栄との恋愛のことを書いた『黒い眼と茶色の目』を読もうと思っているが、未読のままである。鴨下信一著『面白すぎる日記たち』に、「日記の本質を射止めているような日記、そして読んで面白いという意味ではこれにまさるものはない、読むべき日記をただ一冊というならばただちにこれを推薦する」とある『蘆花日記』も未だ手に取っていない。

芦花公園駅の隣の八幡山駅まで戻り駅ナカで昼食をとる。再び京王線に乗り、隣駅の上北沢駅へ。「賀川豊彦記念松沢資料館」を訪れたが、これまた月曜休館。碧川かたとの関係の中で、何か資料がないか尋ねてみたかった。加えて、世界連邦日本国会委員会創設七〇周年記念企画としてミニ特別展「世界連邦運動と賀川豊彦」が開催中であつたが、これも見えず誠に残念な結果に終わった。

仕方がないので、再び京王線で新宿駅へ。山手線に乗り換え代々木駅へ。途中、山野美容学校、代々木ゼミナールの巨大ビルを見上げながら、「婦選会館」に行った。たまたま久保公理事長にもお会いでき親しくお話することができた。二階の「市川房枝記念展示室」では、新婦人協会創立100周年記念特別展「新婦人協会と全関西婦人連合会」を開催していた。二〇一五年三月発行の『市川房枝と歩んだ「婦人参政権運動」の人びと』という表題の分厚い本が置かれているのが目に入り、何十人かの人物がプロフィール入りで取り上げられている中に、残念ながら、碧川かたの名は無かった。山柙儀重が取り上げられており、参考文献に掲げられている『女性展望』1938年2月号の該当頁を一枚五〇円でコピーしてもらった。山柙についての研究は、現在までの所、松尾茂

著「20世紀ふるさと先人群（127）」（一九九九年一月二五日付日本海新聞）と松尾尊兌著「由谷義治と山柙儀重」（平成13年3月『鳥取市史研究第21号』）だけである。

代々木駅から再び山手線に乗り浜松町駅へ。少しばかり歩いて三田会館八階の「友愛労働歴史会館」に行く。エントランスには松岡駒吉の胸像も飾られていた。以前に矢部貞治と民社党との関係をメールで尋ねた間宮悠紀雄事務局長にお会いでき、話が聞けた。民社党関係資料はそろっているとのこと。時間の都合もあり、常設展「日本労働運動の一〇〇年余―友愛会・総同盟（戦前）を中心とする―」及び企画展「協定会結成100年渋沢栄一と鈴木文治・友愛会」のざっとした説明を受け、図録としては発刊していないとのことであり、展示内容そのままを添付ファイルでメール送信して頂くことにした。松岡駒吉の生誕130年・没後60年に当たる昨年は、企画展「松岡駒吉 ひとすじに労働者の利益を守った男」を開催されている。

以上で、一七時を過ぎ、タイムアップ。最終便の羽田一九時一五分発で帰鳥した。

ダーチャと初戀

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

序

欧州と日本を往き来した何度目かのフライト（アエロフロート）で、中継の地モスクワに一泊し帰郷した想ひ出の一齣。

いつもは空港近くの大きなホテルに宿泊。文字通りトランジットだが、その折りは随分と郊外迄バスに揺られ、だうみても「…城跡だらうか？ 巨きなお屋敷」にしか見えなひ邸宅（らしき所）に投宿。疲れや時差ボケもあつたらう、荷を解く事もせず直ぐ泥のやうな眠りに落ちた。翌朝、サモワールの香に誘はれ（「風と共に」のオハラ一家みたひ、半螺旋の豪華な階段を）階下の広間に降り「此処はいったい何といふ所！」。更に驚きに目を見張つた庭に出て驚愕…こんな所は…ロシア文学によく出て来る

かつて大都市近郊の莊園（別荘）の庭では？ 樹立や小川をちよつと…どころでは無い！ 行けども行けども隣家の蔽と云つたものはまるで見当たらない、深い森の中…広大な敷地。きつとチェーホフやトルストイの物語もこんな所で繰り広げられた？ そんな雰囲気。9月の柔らかく明るい陽射し、庭の白樺並木と馥郁たるサモワールの香は此のまさに思ひがけない別荘（ダーチャ）の朝を強烈に印象づけるものだった。

I

其れからかれこれ30余年…今「初戀」を読み返し乍らふつと、件のダーチャの庭を思ひ出して居た。少年の家の庭は、あれ程廣大な敷地では無いだらう…物語を追求してゐるかつての少年、物語の重要な鍵を握る父の歳も…遙かに越して了つた現在の僕には、此の一冊が昔とはかなり違つたニュオンスに謳はれる。

結末を知つて居ると云ふだけではなく、何かしら総体を俯瞰出来る客観性は備わつてゐる…なのに主人公を通し、戀に堕ちた者だけの知るときめきや甘酸っぱさ、焦燥感、ほろ苦さ、何とも云へなひ浮遊感を扱ふ筆致にこそ唯唸らされて了ふ。

出逢ひや、彼女の心變はり？ に気付く場、ナイフを握りしめ戀仇を待ち構へやがて思いがけなく父の姿を認めてしまふ、そんな事件の起こる場としての「庭」。

II

過ぎ去つて了つた時の象徴、決して戻って行けず還る事ははぬ青春時代、夢の俤としての「場」。

宿命に翻弄され、爛熟した帝政時代・階級社会の崩落と共に音をたてゝ急速に変貌する世の中。見棄てられ埋もれゆく文化、人物像。パステルナークの「ドクトル・ジバゴ」等にも共通する時代描写。

かつてほんの目と鼻の先だった時代に措き忘れて了つた儂く、貴ひ純粹なるもの、ごく親しかった其れらを初恋に準へ懐かしむ、凡てはセピア色に霞み唯ノスタルジアと云ふ名の通奏低音に載せ奏でられる、さながら挽歌の如く…。

2019. 11. 24

「今回の一冊」

『初戀』 I.S. トウルゲーニエフ著 ①神西清訳新潮文庫

②沼野恭子訳光文社古典新訳文庫

「今回の一枚」

S. ラフマーニノフ、ロマンス（第一弦楽四重奏断章）

①ボロディン Q. (Fac. 1994 ベルリン) ②ブダペスト SO

(ワシントン国立国会図書館ライヴ 1952) ③リムスキイ

|| コルサーコフ Q ①②は全二楽章



(画 A・T)

幻の歌人・杉原一司のことを調べながら

安藤 隆一

(元鳥取県立公文書館長)

杉原一司とは、この『音信不通』にも2回ほど登場しているが、前衛短歌の旗手として有名な塚本邦雄の盟友であり、塚本に次のように言わしめている。

「頭脳俊敏、苦み走った美丈夫であった。十年、二十年先の定型詩の方向を指し、その修辞学の理想を考え、言葉の海におぼれようと私の私を励まし導いてくれた。戦後前衛短歌の隠れたリーダーの一人として、私は顕彰し続けて来た。私の作品のバックボーンを作りあげてきたのは、彼である」と。(一九九五年一月二七日朝日新聞)

実は一司が私の叔父であることは、本誌に掲載の「鳥取あれこれ」のある回で、私の友人の内田克彦氏が明かしている。一司は、1950年に23歳で夭折し、来年が没後70年となる。塚本ファンの内田氏は「杉原・塚本往復書簡」の出版に執念を燃やしている。

現在、鳥取大学地域学部の岡村知子准教授、田中仁名誉教授らの手によって、この往復書簡などの研究が始まっているが、その成果は、数年後を待つ必要があるという。

こうした中、本誌の発行人の奈良敏行さんから、「杉原一司の単独歌集がこれまで出ていないのなら、まず、歌集を出したらどうか」という提案を受けた。

一司の長男杉原ほさき氏と相談して、歌集を出そうと刊行会を組織した。(来年3月刊行予定。)
「この際、未公開も含めた一司の全作品を網羅したものにしたらどうか」という提案もあったが、一司研究も緒に就いたばかりなので、一司自身が発表した4つの歌誌掲載の歌のみとした。

この歌集に載せるべく一司の関係年譜の作成に取りかかった。その過程で、(数年前に亡くなった一司の妻令子の「一司に関する3枚のメモ」によると、)鳥取商業時代の短歌などを書いたノートを自分の手で、また、死期が迫ったところに「丹比を離れて天理に行った頃の資料」は友人の岸本光治に依頼して、と2回にわたって焼却して、資料が非常に少ないことが分かった。

一司について書かれた書物は、塚本邦雄『残花遺珠』(邑書林、1995)、竹内道夫編『覚書 杉原一司』(花軸)「メトード」を中心に(富士書店、2000)や塚本側から書かれた研究書などがあるが、それらは、ほぼ、安部国民学校(現・八東小学校)教師時代の前川佐美雄との出会いから始まっている。

例えば、どんな動機で「短歌」を作り始めたか、誰に手ほどきを受けたかさえ、明確ではない。唯一、杉原家に残されていた妻令子の前出の「メモ」によると、「商業時代から短歌を作り始める」とある。（これまでの書物には「鳥取商業学校（現・鳥取商業高等学校）出身」という記述はあっても、この事実は載っていない。）

まず、鳥取商業高等学校から調べることにした。幸いにして、鳥商の校長は奈良さんが昵懇の岩田直樹先生。

奈良さんとおして訪問をお願いしたら、「本校図書館の遠藤司書に史料の存在を確認したところ、古いものはないとのこと。一度ご来校いただいて、書庫の様子を見ていただいてもよいのではないか、と思っております。」と、奈良さん経由で残念な返事。「資料がないことを確認するのも、調査ですから」と強がり返信して、鳥商を訪問した。

一司が登場すると思われる資料どころか、資料そのものがほとんどないのである。その量は図書館の片隅の書棚に一段にも満たないくらいであった。終戦直後、鳥商は鳥取西高に吸収合併され、鳥取西高商業科となっていた。その後、独立して、久松山下から離れた湖山の地で、鳥取商業高等学校となった。そんな事情で、資料は残っていないようだ。（西高の資料室には少しは残っている

可能性もあるが。）それでも、「100周年記念誌」をはじめ数冊の周年記念誌を借りて帰った。その一冊から一司の名前を発見、そこから辛づる式に調査し、かなりの事が分かった。その内容を岩田先生に下記のようにメールで報告した。

「『創立八十周年記念誌』の同級生の梶田さんの文章の中に、一司が出てきました。その中に、一司が同級生の故中林の歌集『落果』を編纂したとありました。この『落果』を読むと、一司の書いた「あとがき」に、吉村撫骨に短歌を習ったとありました。鳥商で、文学青年たちを『回覧雑誌』という文芸誌（1冊作って回覧する）を作っていたようです。吉村撫骨を、図書館で調べると、撫骨は、当時の鳥商の国語教師の池本利美らと「鳥取短歌連盟」を結成していました。話は、鳥商に戻ってきました。」

更に、岩田先生へのメールを記しておこう。

「文書や資料は、将来の為に残しておくという社会的習慣のない日本です。よく例に出すのですが、16世紀のイタリアの画家カラバッジョは、ローマで起こした事件の裁判記録によって、彼のプロフィールが分かり、美術的研究が進んだようです。日本の「国の公文書」は、1年も経たず廃棄して、どんなものでしょうか…。（笑）」

元高級官僚による暴力癖のある

引きこもり子弟殺害事件の小説性

土賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

救いのない話なんだけど、介護に疲れ、子が老いた親を、もしくは凶暴な子を親が殺める、というのとはなくはなく、うわ小説みたい、と感じるのはそんなことをする筈のない、しなくてもいい層に属する人の犯した犯罪だから、なのであるうか？

てゆくか、小説なら(現実だって…)なぜこういう人物が手を下したのか、その必然性を納得のゆくように書いて欲しい。

僕がちよっと前に書いた小説の自慢は、小説の内容、特に登場人物が完全虚構に近づいたことであった。

それ迄の僕の小説は屢々アメリカに永住する日本人、日系アメリカ人、職業も画家、等々実体験を引き摺っていることが少なくなく、しかしこの作品ではメイ・キヤラクターが都市計画の教授であるアラブ系アメリカ人、他の登場人物もアイリッシュ、イタリア系といった人たちとしたのだが、読んでくれた知人に、完全虚構に心を砕いた割には非~~ミ~~の登場人物が多く出てくることに必然性がなく、マイノリティとしての出自が物語を駆動させてないと云われた。

ブチッと来なかった、という嘘になるが、なぜこういうキヤラクターたちが、この小説に集まっているのか。

「俺だったらこんな小説書かねーな、と独り言ち、小説じゃねーし、と自分に突っ込む。

てゆくか、こういう登場人物が犯人の小説、俺無理かも。

なんで？

何でだろう？

年末年始を父と過ごすため帰国し、この事件をTVで知って、とても気になる。何でだか自分でもよくわからない。

うわ、小説みたい、というのがまずあって、でもこんな小説俺書くかな、ということに蟠っていて、ざわざわと気持ち悪い。

求心となるものは何か。出番（エピソード）は限られていても、書く者は全ての登場人物の来し方いく末（個人史）を熟知していなければならぬ、と今は思っている。

東大卒で、官僚社会を登りつめた超エリートの子殺しの犯人としなければならなかったなら、と僕はその必然性を反射的にもう頭の中で書き始めていたのかもしれない。

そういう人物がそんなことをする筈がない、という認識・前提自体がステレオタイプだから、余計、なんでそういう設定にするんだよ、と気持ちが悪い。

ステレオタイプというのは、膾炙した類型で、「東大出」、「高級官僚」、とくれば、「エリート」↓「高自己管理能力」↓「超規範的市民」、という短絡となり、そんな人の犯す筈のない尊属殺人という設定だと、父親、息子、妻、同僚、父親や妻の両親といった人たちの属性、育った環境、家庭や職場や近隣でのエピソード、と子殺しに向けて収斂する必然性を考えずにはおられない。

特に突出した類型の場合、バランスを取るために配列する属性やエピソードも過激化し、コミカル、もしくはグロテスクに傾きやすい。気がする。

例えば最近の映画に例えると『ジョーカー』か。そういう小説を書きたいのなら良いのかもしれない。

と、実はここから僕は、僕なりの「父親、息子、妻、同僚、父親や妻の両親といった人たちの属性、育った環境、家庭や職場や近隣でのエピソード、と子殺しに向けて収斂する必然性」を創作で書き始め、それは「でもこんな小説俺書くかな」という蟬りに対する浄化行為で、没頭し、その作業を実は大変楽しんだ。

しかし、読み返してみても、ここでそれをシェアするのは、もしそんなキャラクター設定が虚構であったなら、という前提で書きました、と申し開きをしても糾弾されるような Lynch mob 的 今の風潮に予め尻尾を巻いて控える。

もし僕の健全性（？）を言い募るとしたら、「そういう人物がそんなことをする筈がない」というステレオタイプのみで形成されかねない世論の脆弱性と、それが物語としても不完全であることを認識している、ということである。

クリムトと旅の醍醐味

あきの素生

(くうねるめがね)



(前号からの続き。高速バスで愛知県豊田市に向かう途中)

車窓を流れる景色を眺めつつ本を読んでいたはずが、そのうちに眠ってしまったようで、高速に乗ってから、目的地に近づくまでの景色をほとんど覚えていない。短いバスの旅であった。

最寄りのバス停に着くと、運転手さんが親切に美術館への行き方を教えてくれた。お礼を言っつてバスを降り、スマホで地図を確認していたら、女性が一人、前を歩き始めた。おそらく目的地は同じだな、と思いながら、後を歩く。運転手さんが言っていたと思しき交差点で道路を渡り、てくりてくりと歩を進める。右手の小高いところに、小さな森が見える。あの中に美術館があるのだから、と想像できたが…、一向に森に近づけない。ようやく右方に曲がれる道にたどり着き、坂を登る。前には、変

わらずあの女性が歩いている。けれども、美術館らしきものは、まったく見えない。どう考えても、二人とも道に迷っている。一定の距離を保ち、二人で人気のないゆるい坂道をもくもくと歩く。運転手さんが教えてくれた交差点は、おそらく一本手前の小さなものだったのだ。わかりづらいからこそ、丁寧に教えてくれたのだな、と運転手さんの気配りに思いを馳せながら、スマホを取り出す。少し引き返せば、美術館につながる道がありそうだ。前の女性に声をかけようか。でも、後ろからひたひたと付いてくる見知らぬ者に声をかけられても、迷惑かもしれない。美術館に行くとも限らないし…などと逡巡し、結局一人で引き返した。

なんとか美術館の裏手に出て、中に入ると、チケット売り場に行列ができていた。ロッカーに荷物を預けたり、正面玄関を見に行ったりと、少しばかりうろうろしてから列に並んだところ、数人前に、例の女性の姿が見えて、安堵した。

何だかんだで、家を出てから6時間強。やっとたどり着いた美術展は、とてもすばらしかった。特に印象に残っているのは、「ユディトI」と「ベートーヴェン・フリーズ」。

「ユディトI」をひとことで表すなら、匂い立つような、

だろうか。美しく、官能的な女性、黄金の装飾といった「クリムトらしさ」が詰まっている。画集などで見ても魅力的な作品だったが、実際その前に立つと、絵の持つ力に惹きつけられた。たくさんの来場者が、思い思いの場所から「ユディトI」を眺めている。静寂はない、けれど、うるさくもない。さわさわと満ちる声や音、人びとの熱、高揚が、空間を特別なものになっているように感じた。

「ベートーヴェン・フリーズ」は複製だが、スケールの大きさに圧倒された。展示室の壁三面を使った作品だ。ベートーヴェンの交響曲第九番をテーマに、「黄金の騎士」が「病」「狂気」「死」などと敵対しながら、楽園にたどり着くまでの様子を表現している。楽園では、天使たちが「歓喜の歌」を歌っている。部屋にとどまり、ずっと見ていたい気持ちに駆られた。駆られるのは、みな同じらしく、椅子が埋まっっていて、長居はできなかつた。

展示を堪能したあとは、グッズ売り場を物色する。クリムトの場合、図録はマストだが、葉書は今までさんざん買ってきたので、今回は見送るか。スカーフやアクセサリー、コーヒーカップとソーサーのセットまである。お値段がなあ、そもそもカップ持ち歩けないし、などと、

手を出したり引つ込めたりしながら、ぐるぐる見て回るのも楽しい。

売り場を出ると、ガチャがあった。クリムトの作品に出てる図柄をモチーフにしたピンバッジのガチャだ。どれひとつと、と、小銭を入れてハンドルを回す。何も出てこない。困ってきよろきよろしていたら、近くにいた方が、スタッフを呼んでくれた。無事にカプセルをひとつ受け取り、もう一回挑戦したところ、また出てこない。ハンドルを回すのがゆっくりすぎたようだ。再度カプセルを受け取って中を見てみると、一つめと同じものだった。すると、先ほどの方が、交換しようか、と声をかけてくれた。毎年第九を歌っていて、「ベートーヴェン・フリーズ」を見るために、もう何回もこの美術展に来ていて、何個も同じものを持っているのよ、と笑って、私のもとは異なるデザインのピンバッジを一つもくださった。

一緒に（一定の距離を保って）迷子になった女性に、声をかけたらよかったかなあと思った。見知らぬひと同士のこんなやりとりも、旅の醍醐味だったのに。醍醐味ひとつとピンバッジ三つ、重たい図録を胸に、美術館を後にした。

ママチャリ



ドラメリア (座敷わらし)

自転車を買って替えた。

五年乗った愛車は自転車通勤をはじめるときに買って思入れがあったのだが、ある夜職場を出て漕ごうと踏み込んだ瞬間、メリメリバキと不吉な音を立てながら割れたパーツが落下し、前に進めなくなりました。修理に持ち込んでみたものの、泣く泣く廃車。

さて、次はどんな自転車にしようかとあれこれ考える。

前回は見た目にこだわった。車体の色は好みのダークブルー。ある程度の走行にも耐えうる、少し大きめの変速機付折りたたみ自転車。やはりここは非ママチャリで攻めるか？

……いやいや待て、格好良さで決めてしまつてよいのか。決断しかけて考え直す。シュツとした自転車は、だいたい片側スタンドだが、あれは安定性が悪い。前の自転車は最後には常に何かによりかからないと立っていられなかった。もう少しししんと自立してもらわないと。駐輪場ドミノ倒しを起こしたくない。

荷物が多くなりがちだから、前カゴは付いていた方が

良い。いざというときの備えに荷台もあった方が便利だ。大物を運ぶことがあるかもしれない。ミカンの箱買いとか。経験はないが。

ここは優先順位を見直す必要があるだろう。車を運転しないわたしには、自力での移動・運搬手段は、自転車しかないのだから。見た目より実用性。そうするともう答えはひとつしかない。安全で、使い勝手がよく、乗りやすい、お母さんの味方。

人はこうしてママチャリに乗る。これでわたしも立派なママチャラーだ。

・編集後記：

嬉しいことがあったので、セルフでお祝いをしようと思ひ。頭にGのつくブランドの一番上等なコンビニスイーツを買って帰りました。つかの間の贅沢。
ドラメリア (編集長)

東京暮らしから倉吉へ、拠点を変えた萩原俊郎さんの目に映ったのが、豪商の淀屋があつた旧牧田家住宅の、斜め前の町屋「倉吉ブックセンター」。わたしがうらやむ、期待の、身の丈の本屋です。

奈良敏行 (発行人)